

西宮秋怨

王

昌

齡

芙蓉も及ばず美人の粧

水殿風来って珠翠香

却て恨情も含んで秋扇掩うことを

空と明月懸けて君王待つ

【作者】 王昌齡（六九八〜七五五年）盛唐の詩人。京兆の人。字は少伯。就任した官職の地名から、王江寧、王竜標とも称せられる。山西

省太原に本籍を持ち、京兆・長安に生まれたらしい。七二七年に進士となり、祕書省の校書郎から七三四年に博学宏詞科に及第して汜水（河南省）の県尉となったが、奔放な生活ぶりで江寧（こうねい）の丞・竜標（湖南省）の県尉に落とされた。その後、七五五年安禄山の乱の時に官を辞して故郷に帰るが、刺史の閻丘晄（りよきゆうぎよう）に憎まれて殺された。後に閻丘晄は、安禄山軍の侵攻に対し、唐側の張巡を救援しなかつた罪で、唐の張鎰に杖殺された。この時、閻丘晄は「親がいるので、命を助けて欲しい」と言ったが、張鎰は、「王昌齡の親は誰に養ってもらえばいいのか？」と反論し、閻丘晄は押し黙つたと伝えられる。

【語釈】 *芙蓉：はすの花 *美人：前漢の成帝の妃であった班婕妤（はんししょうよ）のこと

*水殿：池のほとりに建てた宮殿。 *珠翠：真珠や翡翠の髪飾り。 *秋扇：秋の扇。扇は秋になれば用がなくなり棄てられるところから、寵を失つた女性（班婕妤）にたとえる。 *懸明月：夜空のかかる月にわが身を照らされること。

【通釈】 蓮の花だつて着飾つた彼女の美しさには適わない。水上のこの宮に風が入つてきて、簪に花の香りを載せる。胸の想いを押し沈めながら、秋の扇を隠し、名月に徒に君の御幸を待つ我が身を照らす。

【備考】 漢の成帝の寵妃であつた班婕妤が寵を失い長信宮に移つてからのやるせない思いを王昌齡が詩にしたもの